

## 伊藤篤太郎の菌類細密画と今関六也コレクション

The relationship between the fungal drawings by Dr. Tokutaro Ito and  
the Mr. Rokuya Imazeki's collection.

大坪 奏 (OTSUBO Kanade)

### はじめに

伊藤篤太郎博士（1866～1941；以後、篤太郎と表記）は、名古屋ゆかりの植物学の大家、伊藤圭介の孫にあたる。これまであまり知られることのなかった篤太郎の功績や人物史については岩津（2016）の大著に詳しい。植物のみならず多くの分野で功績を残した博物学者であるが、我々日本人になじみ深い「ナメコ」を初めて科学的に記載し、学名 *Collybia nameko* T. Ito を与えたことはもっと広く知られてもよい事実であろう（折原による後出記事を参照）。篤太郎は、その後半生において菌類研究に取り組み、きのこの細密画や研究記録を残した。それらの資料は現在、神奈川県立生命の星・地球博物館に「今関六也コレクション」の一部として収蔵されている。なぜ篤太郎の資料が縁もゆかりもない神奈川県に存在するのか、また今関六也コレクションとはどのような関係があるのだろうか。本稿では、これらの疑問に答えながら篤太郎の手がけた細密画について紹介する。

### 今関六也とは

篤太郎の菌類細密画を紹介するためには、当館の今関コレクションについてまず触れなければならない。今関六也氏（1904～1991；以後、今関と表記）は、日本を代表する菌類学者の一人である。1931年から東京科学博物館（現国立科学博物館）、1947年から農林省林業試験場（現森林総合研究所）に勤め、日本菌学会会長、日本植物病理学会会長を歴任した。退官後は神奈川県に住み、神奈川県立博物館（神奈川県立生命の星・地球博物館の前身）を拠点として多くの菌類愛好家を育成した。菌類図鑑がほとんど無かった頃から一般向けの菌類図鑑を数多く出版した普及的功績は大きい。

今関が自宅に遺した研究資料一式は、ご遺族によって当館へ寄贈された。ここに、その研究人生で描き収集し続けたきのこのスケッチ図などの記録が約490枚770点含まれている。写真技術が発達していなかった当時、採集したきのこは、色や形が変わってしまう前にスケッチすることが重要な記録手段であった。新種や日本新産種の記録のためにも図が描かれた。さまざまなサイズの紙片に描かれたこれらの細密画を、今関は後日改めて種ごとにA3サイズの台紙に糊で貼り直し整理した。分類群は当時で43属に渡り、研究の傍らに置き参照するためのオリジナル図鑑として用いていたと類推できる。それが今関六也コレクションの菌類細密画である。

## 伊藤篤太郎の菌類細密画

当コレクションの一部として、伊藤篤太郎によるこの細密画および研究記録35枚55点がある(表1)。これらは今関氏が描いた細密画と同様にA3サイズの台紙に貼られているが、糊によるベタ貼りではなく、三角形のコーナーで四隅がはめ込まれており、その扱いは別格のようだ(図1)。

細密画の描画を担当したのは、佐久間文吾という洋画家である。佐久間は当時篤太郎が講師を務めていた東北帝国大学で専任の絵師であった(詳細は岩津2016を参照)。その後、台北帝国大学理農学部に渡り、日本

昆蟲圖鑑(1932, 北隆館)など多くの専門書や図鑑に絵を残している。今回の細密画の多くには、丸く囲まれた「B.S」というサイン、あるいは今関による但し書きで「Sakuma-B」とあり、佐久間文吾によるものであることは明らかである(図1)。

細密画に加え、伊藤篤太郎自身による簡易的なスケッチや観察記録も付されている。詳細は折原による次稿を参照されたいが、当時新種として発表を予定していたと思われる原稿も数点見つかっており、注目に値する。

貼られた台紙には今関によるコメントが記されている。例えば図1では、伊藤篤太郎の筆跡で和名「あかちたけ」とあるが、台紙下端には今関の筆跡で和名「アカモミタケ」と書かれている。他にも、学名を最新情報に従って修正したり、再同定している例も見受けられ、今関が伊藤篤太郎の記録をもとに自身の資料に組み込み、随時修正しながら活用していたことが読み取れる。

ほとんどの台紙には、Ex. Herb. Dr. T. Itoという印が押されている(図1)。「伊藤篤太郎博士の植物標本庫由来のものである」という意で、この印がどこでどのように押されたものなのかしばらく不明であったが、今回の企画展「伊藤篤太郎生誕150年—初めて植物に学名をつけた日本人—」において、国立科学博物館所蔵の篤太郎の植物標本に同じ印が押されていることを知り得た。この事実は、それまで類推するしかなかった篤太郎と今関の関係性を裏付けるものとなった。両者には38歳の差があるが、その人生は一部重なっている。篤太郎は1928年に東北帝国大学を退官したあと東京の自宅に戻る。この頃、今関は東京帝国大学に在学中で、その後1947年まで東京科学博物館に勤めた。同じ東京で菌類研究に携わっているものどうし、何らかの交流があったことは想像に難くない。この頃に篤太郎が今関へ細密画を託した可能性もあるが、現在のところそれを証明するような資料は見つかっていない。篤太郎の死去後、遺された標本は国立科学博物館へ寄贈された。この植物標本に押された印と、細密画に押された印が同一のものであることから、篤太郎の標本と細密画は同時期に国立科学博物館へ託された可能性が高い。そのときに印が押されたものの、細密画だけは標本と異なる性質であることから館に正式に受け入れられることはなく、今関個人の研究資料として活用されていったと考えられる。

図らずも篤太郎のナメコの図はその後タイプ標本として指定され分類学的にも大変貴重な資料となっている。明治、昭和期に描かれた細密画や第一級の研究者が残した資料に歴史的・学術的価値があるこ

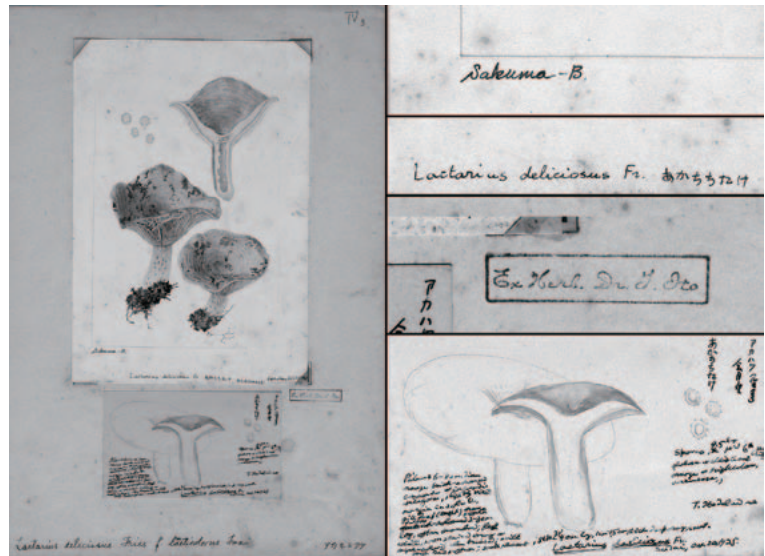


図1. アカモミタケ細密画(KPM-NCI243)。(左)佐久間文吾による細密画と篤太郎によるスケッチ画及び観察記録が上下に貼付されている。(右、上から)今関による但し書き(Sakuma-B);種名は篤太郎の筆跡;Ex. Herb. Dr. T. Itoの印;篤太郎のスケッチ画及び観察記録。

表1. 神奈川県立生命の星・地球博物館に収蔵されている伊藤篤太郎の菌類細密画一覧。

資料番号	図に書かれた種名	採集地	採集者	採集日	点数	資料内容	図の描画者	その他記事事項
KPM-NCI444	ナラタケ <i>Armillaria mellea</i>	東京上野公園帝室博物館後庭	伊藤篤太郎	1931/11/08	3	図1点, 記録2点	佐久間文吾	
KPM-NCI60	<i>Boletus</i>	仙台	土橋	1926/秋	1	図1点		
KPM-NCI67	<i>Boletus</i>	仙台	土橋	1926	1	図1点		
KPM-NCI68	<i>Boletus chrysenteron?</i>	岐阜県養老郡笠郷村船附	伊藤篤太郎	1927/08	1	スケッチ1点	伊藤篤太郎	今関: <i>Boletus versicolor?</i>
KPM-NCI70	スメリキクケ <i>Boletus luteus</i>	仙台亀ヶ岡八幡奥山	伊藤篤太郎	1924/10/12	1	図1点	佐久間文吾	今関: “アミタケ又アミモタシ” とあるも <i>B. luteus</i> ならん
KPM-NCI77	スメリキグダ <i>Boletopsis luteus</i>	仙台	伊藤篤太郎	1924/10/12	1	図1点	佐久間文吾	今関: <i>Suillus luteus</i>
KPM-NCI102	<i>Collybia distorta?</i>	仙台 御裏林	伊藤篤太郎	1925/09/20	1	図1点		今関: <i>Collybia</i>
KPM-NCI107	エノキタケ <i>Collybia velutipes</i>	東京目黒 林業試験場栽培		1926/11/06	1	図1点	佐久間文吾	
KPM-NCI111	<i>Collybia</i>	仙台	土橋	1926/10	1	図1点	佐久間文吾	大正十五年十月廿日寫
KPM-NCI123-2	ムラサキフウセンタケ <i>Cortinarius purpurascens</i>	羽後大館	太田	1925	1	記録1点	伊藤篤太郎	むらさきしめぢ, はとばしめぢ
KPM-NCI185	<i>Hygrophorus</i>	仙台	伊藤篤太郎	1924/10/12	1	図1点	佐久間文吾	
KPM-NCI187	オホサクラシメヂ <i>Hygrophorus erubescens</i>	仙台			2	図1点, 記録1点		かきしめぢ, 仙台市内ニ売りニ 来ル
KPM-NCI208	クリタケ? <i>Hypholoma lateritium?</i>	仙台 陸前		1926	1	図1点	佐久間文吾	
KPM-NCI243	アカモミタケ <i>Lactarius delictosus</i>	仙台		1925/10/20	2	図1点, 記録1点	佐久間文吾	あかちちたけ, あかはつ (仙台 方言)
KPM-NCI257	ハツダケ <i>Lactarius sanguifluus</i>	仙台 陸前		1925/10/17	1	図1点	佐久間文吾	
KPM-NCI259	ツチカブリ <i>Lactarius piperatus</i>	仙台 御裏林		1925/10/19	1	図1点	佐久間文吾	シロチチフダケ 仙台方言
KPM-NCI260-4	ツチカブリ <i>Lactarius piperatus</i>	仙台 陸前	伊藤篤太郎	1924/09/27	1	図1点		かはちちたけ (安田)
KPM-NCI270	シヒタケ <i>Cortinellus edodes</i>	仙台	伊藤篤太郎	1931/06/11	1	スケッチ1点	伊藤篤太郎	
KPM-NCI301	<i>Leptonia sendaica</i>	仙台 陸前	土橋忠重	1926/09/27	5	図1点, 記録4点		
KPM-NCI352	ナメコ <i>Pholiota nameko</i>	仙台			1	図1点		
KPM-NCI354	ナメコ <i>Pholiota nameko</i>	仙台		1925/01	1	図1点	佐久間文吾	大正拾四稔壹月廿八日寫
KPM-NCI356	ナメコ <i>Pholiota nameko</i>	仙台			1	図1点	佐久間文吾	
KPM-NCI357	ナメコ <i>Pholiota nameko</i>	福島県大沼郡西川村宮下		1924/11/12	1	図1点		
KPM-NCI364	クリタケ <i>Pholiota lateritium</i>	宮城県青根	伊藤篤太郎	1924/秋	1	図1点	佐久間文吾	
KPM-NCI378	スギタケ <i>Pholiota squarrosa</i>	仙台	Kiichiro Sasaki	1926/10/29	3	図1点, 記録2点	佐久間文吾	大正拾五年十一月六日寫/ measured by Tsushihashi
KPM-NCI397-1, 2, 3	スギヒラタケ <i>Pleurotus porrigens</i>	仙台	伊藤篤太郎	1927/10/08	3	図1点, 記録2点	佐久間文吾	昭和二年十月十一日寫
KPM-NCI408	記載なし ( <i>Russula</i> )	仙台	伊藤篤太郎	1924/10/12	1	図1点		
KPM-NCI409	<i>Russula foetens</i>	仙台	伊藤篤太郎	1924/09	1	図1点	佐久間文吾	大正拾三稔九月廿日自然大
KPM-NCI458-3, 4	むらさきしめぢ	秋田 大館	太田	1925/11/06	2	記録2点	伊藤篤太郎	ハトバシメヂ (大館方言)
KPM-NCI461-4	ヤグラタケ <i>Tricholoma</i>	仙台			1	図1点		
KPM-NCI462-1, 2	オホムラサキシメジ <i>Tricholoma personatum</i>	仙台		1927/11/12, 1926	1	図2点	佐久間文吾	
KPM-NCI465	<i>Tricholoma muscarium</i>	陸中?			5	図1点, 記録4点		方言きんたけ
KPM-NCI480	きしめぢ <i>Tricholoma equestre</i>	羽後 秋田市大館	太田	1925/11/07	3	図1点, 記録2点	佐久間文吾	秋田方言きんたけ 食用
KPM-NCI486	<i>Tricholoma</i>	仙台		1926/10/xx	1	図1点	佐久間文吾	大正十五年十一月八日寫
KPM-NCI0491	<i>Tricholoma</i>	羽後 秋田市大館	太田	1925/11/06	1	図1点		ギンタケ 秋田市大館方言

とは近年認識されつつあるが、日本の博物館学の黎明期であった当時では、博物館資料として受け入れない判断は当然であったかもしれない。現在でも、自然史博物館ではもちろん標本が第一優先で、標本以外の資料は収蔵庫の状況によって受け入れ不可となる場合も多いと思われる。受け入れ可能な場合でも、その整理や活用は二の次になってしまう現実も存在する。当館では研究者が残した標本以外の資料の重要性を鑑みて受け入れを積極的に行っているが、その整理と活用は途に就いたばかりである。なお、ここで紹介した篤太郎の細密画を含む今関六也コレクションは、2017年4月から当館のホームページ「電子百科」にて公開予定である。

## 謝辞

貴重な資料をご寄贈いただいた、故今関士郎氏をはじめとする今関六也氏ご遺族の皆様に深く感謝申し上げます。コレクションの受け入れ及び解析にあたっては出川洋介博士、折原貴道博士にご助言いただき、当館ボランティアの皆様には整理作業にご尽力いただいた。岩津都希雄博士、野崎ますみ氏、田中純子氏には、伊藤篤太郎に関する多くの貴重な情報をいただき、深く御礼申し上げます。

## 引用文献

岩津都希雄（2016） 伊藤篤太郎—初めて植物に学名を与えた日本人—（改訂増補版）。八坂書房，東京，349p.